

〈雑記〉「査屏球論文」は論文と言えるのか

——「三部構成」の欠如と「修辭法」に反する史料引用——

加藤 一寧

はじめに

五山関係史料すなわち主に禪語録を引用する論文を、どのように読解すればよいのか。これは確かに難しいことではある。しかし禪語録を引用する論文である以上、少なくとも次の二点をふまえて、読解すべきことはまちがいない。

第一に、論文は、戸田山和久『新版 論文の教室』（NHKブックス、二〇一二）が定義するように、(1)「問い」(2)「答え（主張）」(3)「論証」の三要素つまり「三部構成」を欠いてはならない⁽¹⁾。第二に、禪語録の大部分は漢詩・漢文であるので、一海知義『漢詩入門』（岩波ジュニア新書、一九九八）に記される漢詩文の形式や規則、つまり「修辭法」に注意しなければならない⁽²⁾。

この「三部構成」「修辭法」の形式面から論文を分析すれば、その分析結果に異論が生じにくいはずである。

具体的には、第一の「三部構成」の場合には、論文の三要素が明確に記述されていないければ、その文章

は論文として成立しない。第二の「修辭法」の場合には、引用史料に形式上の規則にあわないう句讀があれば、誤読となる。しかもその場合、「論証」もまた正確でない可能性が高い。

そこでこの二点に留意して、五山関係史料を用いた論文を読み解くと、論文として成立しないものが出てくる。査屏球(谷口高志訳)「寒山拾得の受容とその変遷——五山禅僧の詩歌・絵画に見られる寒拾の形象と宋元禅文学の關係」(堀川貴司・浅見洋二編『蒼海に交わされる詩文』「東アジア海域叢書」第十三卷、汲古書院、二〇二二、以下「査論文」と略す)もその一つである。

この「査論文」が収録される前掲『蒼海に交わされる詩文』は刊行されてから、すでに一定の期間が経っているが、しかし五山関係史料を用いる学問においては、「査論文」に対して何の論評もなされていない。これは看過しがたいことである。なぜならば、このノーコメントという姿勢が「査論文」の質の低下を招いた原因の一つだからである。

もちろん五山関係史料を用いた論文の質の問題となると、その批判対象は「査論文」だけにとどまらない。だが私見では、それらの論文に共通する問題は、引用史料に対して正面きった解釈を行っていない点にある⁽³⁾。しかし「査論文」の問題は、それ以外にも形式面での初歩的な誤りが多く、論文の質の低さが際立っている。

そもそも「査論文」は、二〇〇七年九月八日に大阪大学で行なわれた文部科学省科学研究費補助金特定領域研究「東アジア海域交流と日本伝統文化の形成——寧波を焦点とする学際的創生——」の重点項目「東アジアのなかの五山文化」の国際シンポジウム「東アジア海域文化交流のなかの五山禅林Ⅰ」における研究発表に基づくものだから⁽⁴⁾、その際に、研究者の間から、何らかのコメントや批判があつてしかるべきで、それらが「査論文」に反映されていなければならない。

しかし、査屏球氏が行なった研究発表の成果は、最初に「寒山拾得的受容与変容―五山禅僧詩画中寒拾形象与宋元禅文学關係考」(『寒山子暨和合文化国際研討会論文集』浙江大学電子音像出版社、二〇〇九、以下「査中文」と略す)として公にされるが、「三部構成」が欠如し、「修辭法」上の誤りも看過されたままである。さらにその四年後、「査論文」として前掲『蒼海に交わされる詩文』に収録される。しかし「査論文」の内容は、「査中文」をわずかに改変しただけで、「三部構成」の欠如や「修辭法」上の誤りについては訂正されていない⁽⁵⁾。つまり五山關係史料を用いる学問において、論文のチェック体制が機能しなかったのである。

そこで本稿では、まず「三部構成」「修辭法」の二点から「査論文」を分析する。その分析結果から「査論文」については、前掲『論文の教室』『漢詩入門』に記される基本中の基本がなっていないことを明らかにする。

また「査論文」の史料引用の誤りをとりあげ、誤字のいくつかは、査屏球氏の論文原稿の簡体字が機械的に新字体へ変換されたために生じたことを明らかにする。そこから翻訳編集の際に、引用史料に対して直接原文にあたっての確認が行なわれなかったことを指摘する。

一、「三部構成」「修辭法」による分析

最初に長文になるが、前掲『蒼海に交わされる詩文』序説七頁に載せられる「査論文」の要約を掲げる。

祖師(達磨以下、中国の禅の高僧たち)のなかでも特異なキャラクターで知られる寒山・拾得を詠ん

だ詩やその絵画を博搜し、鎌倉後期の来日僧や留学僧に始まって室町初期に至るまでの流れを、破庵ほあん派・松源派・曹源派・松源派くりん古林下および大慧派といった法系ごとに分類して辿っていく。日本では、宋元代の禅僧によって祖師としてカリスマ化されていた二人のイメージを継承しつつ、そこに喜劇的な性格が強調付加され、室町から江戸に至っても禅の世界の人気者であり続けたが、これは、明清代の中国において土着信仰と融合して民間神に変化するのとは大きく異なる現象だ、と指摘する。表面上は大きな変容を遂げているようであり、本質はかなり忠実に継承している、日本の外来文化の受容のあり方を示す例としても興味深い。

「査論文」の考察対象は、中国宋元代の禅僧・日本の五山僧等の語録にのこされる寒山拾得に関連する詩文である。「査論文」は、それらの作品を法系すなわち門派ごとに分析し、画賛については、現存する絵画史料と関連づけて検討している。

しかし私は、「査論文」から「寒山拾得のイメージと関連する詩文や絵画が、どのように受容され、そして変容していったか」について、新たに得るものは全くなかった。その理由は以下の二つである。

①「査論文」は受容・変容過程を門派の視点から分析するが、その理由が示されていない。つまり先行研究の検討が不十分なままで、「問い」を導き出せていない。そして「問い」がない以上、「査論文」の「答え(主張)」も「情報を時系列的に羅列している」⁽⁶⁾だけである。つまり後掲の羅時進・崔小敬両氏の研究の枠組みを敷衍し、門派ごとに史料を貼り付けているだけで、新たな主張が付加されていない。

②形式を無視した史料引用と読解の問題がある。不正確な読解の集約では「論証」にならない。そしてこの問題は、以下の三点に分類できる。(1)句読の誤り、(2)先行研究参照不備、(3)史料引用

の仕方。

では、①②について見ていく。

①「問い」の欠如——門派の視点——

まず「査論文」四二頁で、次のように述べられる。

本稿では、来日した禅僧の中国における師承関係や、来日後における五山僧との師承関係、また入宋・入元した日本僧の中国における師承関係について、^①その継承と発展のあり方を分析しつつ、寒山拾得に関する文学の変容を考察していく。以下、^②影響力のあったいくつかの門派ごとに整理を行い、互いに関連する作品の比較を試みたい。

しかし傍線①が、具体的にどのような分析されているのか、私には「査論文」中に明瞭な記述が見つけられない。また続けて傍線②と記されるが、要するに、これも「門派ごとに作品を見て行く」と述べているに過ぎない。その実、門派ごとに見ていく意義がどこにも説明されていない。

ところで、管見で門派の視点を採用した研究をあげれば、たとえば外交史においては、伊藤幸司『中世日本の外交と禅宗』（吉川弘文館、二〇〇二）がある。同書の中で、伊藤氏は、村井章介『アジアのなかの中世日本』（校倉書房、一九八八）が提示した枠組みを再検討する。すなわち中世後期に渡海した禅僧たちは、ほぼ外交機関としての「五山」に属し、彼らは「五山」というひとまとまりで捉えられてきたが、伊藤氏はその点を問題とし、より細かな門派の視点から再検討を加え、当時の外交のあり方や禅宗勢力の実態をあきらかにしようとした。

また五山文学においても、たとえば太田亨「初期禅林における外集受容初探——杜詩受容を中心として

―(『中国中世文学研究』四一号、二〇〇二)では「禅僧の詠出法の特徴を整理すると、門派毎に特徴を指摘することができそうである」との見通しを立て、玉村竹二『五山文学』(至文堂、一九五五)の提示した「宋・元・明の三大系統」の分類には問題があることを見出す。そして門派ごとに詠出法の違いがあったと結論づける。

伊藤・太田両氏の研究は、歴史と文学の違いはあれ、ともに先行研究が示した枠組みすなわち「五山」や「宋・元・明の三大系統」では、実態把握に不十分であると考え、新たに門派の視点から再検討を加えた点が評価できる。

しかし「査論文」は、伊藤・太田両氏等の門派の視点からの研究に言及しない。

そもそも「査論文」では、先行研究に対する言及が少なすぎる。序文およびその注にあげられる編著・論著名は、上村観光編『五山文学全集』(思文閣出版復刻版、一九七三)・玉村竹二編『五山文学新集』(東京大学出版会、一九六七〜八二)・蔭木英雄『五山詩史の研究』(笠間書院、一九七七)だけである。

序文以外では、第四章で有馬頼底(劉建訳)『禅僧生涯』(中国社会科学出版社、二〇〇〇)をあげて、日本の鎌倉から室町初期にかけて、禅文学には三つの派があったことを説明する。

また終章「おわりに」では、島田修二郎・入矢義高監修『禅林画賛 中世水墨画を読む』(毎日新聞社、一九八七)から、春屋宗園(二五二九〜一六一一)の画賛を引用する。これは日本で寒山拾得のイメージがだんだんと世俗化していったことを説明するための引用である。さらに同章において、羅時進「日本寒山題材絵画創作及其淵源」(『文藝研究』二〇〇五年第三期)に基づいて、江戸時代以後の日本における寒山拾得の受容について述べる。他方、崔小敬「寒山 重構中的伝説影像」(『文学遺産』二〇〇六年第五期)によって、中国における寒山拾得のイメージの変化、具体的には「和仙」「合仙」という民間神への変容

に言及する。

ここでは、以上の論著の引用の仕方やその内容が適切であるかどうかの問題は論じないが、「査論文」には、先行研究をある程度まで網羅検討した上での「問い」すなわち論点の設定はない。

②史料の誤読——「修辭法」を無視した句読と不正確な「論証」——

1【句読の誤り】

(1)無学祖元の例

【一】上堂「結夏已一月、寒山子作麼生、^a乞無再、面語要隨郷」。

〔「査論文」四三頁・「査中文」三七頁〕

史料【一】は、「査論文」が、無学祖元『仏光録』から引用するものだが、まず「生」(下平八庚)と「郷」(下平七陽)が通押の関係にあり、私は「生」の字の後に、読点ではなく句点を付すべきだと考える。

次に傍線aの句読は、「査論文」「査中文」も同じだから、単なる校正ミスではない。これについては、国立国会図書館蔵『無学和尚初住大宋台州真如禅寺語録』二二葉(嘉慶二年刊〔二三八八〕、WA六一一三)の句読「乞無再面、語要隨郷」が正しい⁽⁷⁾。なお『大正新修大藏經』所収『仏光録』卷一(大正八〇、一三五c)は、間に句読点を打たず、この二句を一句とみなす。

「査論文」は、この史料に対する解釈を示さないが、『仏光録』卷一(大正八〇、一三五c)の注記に「原本冠註曰〔此段恐有缺文歟〕とあるように、この一段には、欠文がある可能性が高く、十分な解釈ができる史料ではない。

実際に内容を見ると、「寒山子作麼生」については、後述するが、まず「乞無再面」は「もう二度と会

いたくない」という意味で、たとえば『夢窓国師語録』(大正八〇、四五―一c)の例がある。

乃云「二千年前、萬化千變。二千年後、乞無再面。好箇太平時節、波旬却具一隻眼」(二千年前に釈迦のおかげで世の中はすっかり変化した。しかし二千年後の今は再び釈迦に会うことがないように願っている。釈迦が二千年前に示寂したおかげで、今は平和な時節であるのだから、波旬が釈迦に示寂を勧めたのも、かえってみどころがあったというものだ)。

次に「語要隨郷」は、「隨郷」が成語の「入郷隨俗」「入郷隨郷」をふまえているので、「その土地に行ったら、その土地で使われている言葉を使わなければならない」という意味である。

ただ私には、「乞無再面」と「語要隨郷」の二句を、一体どのように結びつけて解釈したらよいか、わからない。しかし「査論文」では、具体的な解釈も示さず、しかも句読を誤ったままで、この史料を引用している。

以下、無学の画賛について形式面を見る。

○「寒山」

【二】文殊大人境界、本来無壞無雜。幸得一幅白紙、又添一重垃圾、髮鬢鬆甚面目。

【三】紅葉題詩、青天作屋、再出頭來、与吾洗足、胡写乱写、千偈成集、寒岩倚天、飛湍箭急。

〔査論文〕四三頁・「査中文」三八頁

「査論文」は「寒山」の画賛を引用し、【二】と【三】の二段に分断するが、私は全体で三段に分けるべきだと考える。また「査論文」「査中文」はともに同じ句読なのだから、二段に分断しているのは単なる校正ミスとは考えられない。

まず【二】の「雜」(入声十五合)と「圾」(入声十四緝)が通押し、次に【二】の「目」(入声一屋)と

【三】の「屋」(入声一屋)・「足」(入声二沃)が通押する。そして【三】の「集」・「急」(入声十四緝)が押韻する。

実際『仏光録』巻八(大正八〇、二二七b 以下「大正本」)や京都大学附属図書館蔵『仏光録』仏祖讚一七葉(五山版、「谷村文庫」一・二五ノフノ二貴、七六三七〇八以下「京大本」)は、押韻字によって三段に分断し、句読も押韻字で切っている。また「査論文」は「大正本」に依拠して、網掛けの「𪛗」の字を引用するが、「京大本」によって「𪛗」と改めるべきである⁽⁸⁾。

正しい句読・分段は以下のとおりである。

文殊大人境界、本来無壞無雜。幸得一幅白紙、又添一重垃圾。

髮鬢鬆、甚面目。紅葉題詩、青天作屋。再出頭來、与吾洗足。

胡写乱写、千偈成集。寒岩倚天、飛湍箭急。

○「拾得」

【四】両脚踰躑、又手握節、普賢門風、一斉漏泄。看何書不識義、瞎瞞眼、枉篋氣。

【五】月照峨眉、家山万里。你題詩我磨墨、痴人不識野雲情、涼兔漸遙春草綠。人人銀色、世界処処、白玉樓閣。因你動著筌箒、糞掃堆山積岳。

(「査論文」四三頁・「査中文」三八頁)

「査論文」は、【四】と【五】の二段に分断するが、私は全部で四段に分かつべきだと判断する。また「査論文」「査中文」とも同じ句読だから、単なる校正ミスではない。

第一に【四】「節」・「泄」(入声九屑)が押韻する。第二に【四】の「義」(去声四寘)・「氣」(去声五未)

と【五】の「里」(上声四紙)が通押する。「里」は「義」と四声相配の関係であるから、上声去声の通用すなわち同音異調の通押と考える⁽⁹⁾。第三に【五】「墨」(入声十三職)と「緑」(入声二沃)が通押する⁽¹⁰⁾。最後に【五】「閣」(入声十葉)と「岳」(入声三寛)が通押する⁽¹¹⁾。

「大正本」(大正八〇、二二七b)・「京大本」仏祖讀一八葉は、正しく四段に分断する。ただし「大正本」や陳耀東『寒山詩集版本研究』(世界知識出版社、二〇〇七 以下「陳研究」)四二八頁が、傍線bのように句読するのは誤りで、「京大本」のように、「人人銀色世界、处处白玉楼閣」と対句に句読するのが正しい⁽¹²⁾。

正しい句読・分段は以下のとおりである。

両脚踰躍、叉手握節。普賢門風、一斉漏泄。

看何書、不識義。睇瞞眼、枉篋氣。月照峨眉、家山万里。

你題詩、我磨墨。痴人不識野雲情、涼兔漸遙春草綠。

人人銀色世界、处处白玉楼閣。因你動著笊箒、糞掃堆山積岳。

○「寒山拾得同軸」

【六】文殊普賢、彌陀攫金。撞入娑婆、月下有人。見你相牽、且入草窠。

【七】指月話月、一口一舌。広南除夜、納涼五台。六月下雪、対月論心。唯我与你、見得分明、未能忘指。

〔査論文〕四四頁・「査中文」三八頁

「査論文」「査中文」は同じ句読だから、校正ミスはないと考えられる。

まず【六】は、「陀」[◎]「婆」[◎]「窠」[◎](下平五歌)が押韻する六言詩である。したがって、「大正本」(大正

八〇、二一七c)・「京大本」仏祖讚一八葉・「陳研究」四二八頁・「査論文」の句読は誤りである。

また「査論文」が「上有豊干」の注記を省略したのは問題である。というのも「上有豊干」の注記があることによって、はじめてその前身が「彌陀」である豊干も、寒山拾得とともにこの画賛が記された絵画の中に描かれていることが判明するからである。

次に【七】については、私は二段に分かつべきだと判断する。というのは、「舌」「雪」(入声九屑)が押韻し、「你」「指」(上声四紙)が押韻しているからである。実際、「大正本」(大正八〇、二一七c)は、正しく二段に分断している。ただし「大正本」「京大本」「陳研究」「査論文」は、傍線cのように句読するが、これは「広南除夜納涼、五台六月下雪」の対句として句読しなければならない。

正しい句読・分段は以下のとおりである。

文殊普賢彌陀、攫金撞入娑婆。月下有人見你、相牽且入草窠。「上有豊干」。

指月話月、一口一舌。広南除夜納涼、五台六月下雪。

対月論心、唯我与你。見得分明、未能忘指。

○「四睡」

【八】松門外、双澗曲。人斑変作虎斑、慈悲都是悪毒。你也睡足、我也睡足。風起腥膻、彌満山谷。依依残月転松関、睡裏須還各著姦。話到劫空懸遠事、虎斑終不似人斑。

〔査論文〕四四頁・「査中文」三八頁

「査論文」は【八】を一段とみなすが、二段に分かつべきである。なお「査論文」「査中文」ともに同じ句読だから、校正ミスとは考えにくい。

まず「曲」「毒」「足」(入声二沃)「谷」(入声一屋)が通押する。そして後半は「関」「姦」「斑」(上平十五刪)が押韻し、七言絶句とわかる。

したがって「大正本」(大正八〇、二二七c)・「京大本」仏祖讀一八葉の分段が正しい¹³⁾。なお「査論文」「査中文」は「大正本」より引用するが、網掛けの「臆」の字は、「大正本」「京大本」には「羶」とある。正しい句読・分段は以下のとおりである。

松門外、双調曲。人斑[●]変作虎斑、慈悲都是惡毒。你也睡足、我也睡足。風起腥羶、彌満山谷。
依依残月[●]轉松関、睡裏須還各著姦。話到劫空懸遠事、虎斑終不似人斑。

(2) 義堂周信の画賛の例

○「寒山拾得」

【九】曳帚背人行、一転知他何処。掃塵埃忙忙、不見天辺月、却被寒兄指点来。

【一〇】山衣襍勃窣、頭髮乱婆娑。怪得曳苴帚、満廊紅葉多。手展是何卷、寧非行願經。勸爾急看畢、
国清齋鼓鳴。

(「査論文」四九頁・「査中文」四〇・一頁)

「査論文」「査中文」ともに句読は同じである。校正ミスとは考えにくい。

まず【九】は「埃」「来」(上平十灰)が押韻する七言絶句である。しかし「査論文」・『義堂和尚語録』
卷四(大正八〇、五三九a)も句読を誤る。この場合、「陳研究」四八九頁の句読が正しい。

つぎに【一〇】は、「査論文」・『義堂和尚語録』卷四(大正八〇、五三九a)・「陳研究」四九〇頁も一段
とみなすが、二段に分かつべきである。なぜならば「娑」「多」(下平五歌)が押韻し、「経」(下平九青)

「鳴」(下平八庚)が通押するからである。たとえば新潟大学附属図書館蔵『義堂和尚語録』巻四、二二葉(元禄八年刊「二六九五」、佐野文庫「三〇四四―一」)では、その訓点や送り仮名などからもわかるように、二段に分けている¹⁵⁴⁾。

なお「査論文」「査中文」とともに、「披」の字を網掛けの「被」の字に誤っている。

正しい句読・分段は以下のとおりである。

曳帚背人行一転、知他何処掃塵埃。忙忙不見天辺月、却被寒兒指点来。

山衣披勃窣、頭髮乱婆婆。怪得曳苕帚、満廊紅葉多。

手展是何卷、寧非行願經。勸爾急看畢、国清齋鼓鳴。

以上の無学祖元・義堂周信の画賛史料それぞれの末尾に、「査論文」「査中文」は、「図〇〇」と参照図の番号を注記し、今日のこざれている絵画史料と、そして上記の画賛が表わす画題とが対応することを示す。しかし画賛の分段が誤っている以上、絵画史料と画賛が一對一に対応しておらず、これら画賛史料に関する考察は、全て意味がない。また「査中文」には絵画史料の図版が転載されているが、「査論文」では、残念ながら図版の転載が見送られてしまっている。

「査論文」は、おそらく『大正新修大藏經』の電子データに依拠し、その句読の誤りを引き継いでいる。それだけでなく、その句読を改悪している場合もある。もしあえて「誤読」したのであれば、その説明が必要である¹⁵⁵⁾。

2 【先行研究参照不備】

(1) 「寒山子作麼生」句(と「水枯牛作麼生」句)の理解

上掲【一】の他に、「査論文」六四・五頁には、「寒山子」「水牯牛」に関する史料が五例引用される。その上で「査論文」は「臨濟宗の禪家たちは、これら〈水牯牛〉と〈寒山子〉の公案を結び付けて説くようにな」ったと述べる。

さらに「査論文」は次のようにまとめる。

「牯牛」の公案は、物の相には定めがなく、言語はそれが指し示す物そのものとは異なることを説く。また「寒山」の公案は、彼が普賢菩薩の化身であったという伝説を用い¹⁶、肉体は所詮仮のものに過ぎないことを述べる。両者ともに、³万象はみな空であるという禪の教えを強調しているのであり、それ故に、禪家は両者を一つに結びつけたのである。勿論、『宋高僧伝』等の伝記材料に見える寒山の変身の描写が、精彩に富み印象的であったこともその要因の一つであっただろう。「寒山牯牛」は、かくして禪家が常用する公案の一つとなっていく。

私にはこの一段の意味内容が理解できないが、ただ少なくとも、次のことだけは断言できる。「寒山子(作麼生)」や「水牯牛(作麼生)」の語句を用いた説法は、傍線③のような空を強調したものではないと。なぜならば、この「寒山子(作麼生)」等の語句については、すでに葉珠紅『寒山詩集論叢』(秀威資訊科技股份有限公司、二〇〇六)に詳論があるからである。

『寒山詩集論叢』四二頁によると、まずこれらの語句は結夏・安居・解夏の時に多く使用されている。次に、同書四七頁で『海印昭如禪師語録』(正統七〇、六四五b)の例を注に引用した上で、以下のよう

寒山即水牯牛，水牯牛即寒山，寒山子與水牯牛，在元代海印昭如禪師手上；有了「那事」的代稱，「那事」表面指寒山子與水牯牛，實際上是借寒山子與水牯牛喻「求開悟」一事，

石屋珙禪師曰：

示衆、古徳道：結夏半月日了也、水牯牛作麼生？ 有者道：結夏半月日了也、寒山子作麼生？ 福源道：結夏半月日了也、己躬下事作麼生？

石屋珙禪師之「己躬下事」、與乾乾湜禪師提問「本分事作麼生」、「寒山子作麼生」意同、其意爲：明一己之本分事、要先懂寒山子：懂寒山子即水牯牛、懂得寒山子、也就是御得水牯牛、也就是走向「開悟」。

在結夏期間、將「寒山子與水牯牛」作爲「禪定」表徵的、……

要するに『寒山詩集論叢』からは、「寒山子（作麼生）」＝「水牯牛（作麼生）」＝「己躬下事（作麼生）」という言いかえが成立することがわかる。つまり「己躬下事」とは、修行者自身の境界を指すのだから、「寒山子作麼生」とは「あなたがたは、〈寒山詩〉に表現されているような寒山の心境が獲得できたか」という意味である。

また「水牯牛作麼生」も、牛が「十牛図」において禅の悟りにいたる段階を表わすために、心の象徴として用いられていることからわかるように、「あなたがたは、己事を究明できたのか」の言いかえにほかならない。この点を「査論文」は理解していない。

これは「査論文」における大きな誤りの一つであって、とりわけ結夏・解夏の上堂に「寒山」の語がある場合、「寒山」とは、実は「修行僧やその心境や悟り得たところ」を指し示している。

以下の三例についても、そのことは意識されなければならない。

【一二】次日上堂「十五日已前鉢盂口向天、十五日已後靴却紫茸氈。正当今日躡」。〔卓樞杖云〕「寒山不管安居事、須彌頂上打鞦韆」。

〔査論文〕四六頁・〔査中文〕三九頁

「査論文」の解釈

僧侶でありながら富貴となる者がいるが、寒山はそのような得失や浮沈に全く興味を示さず、ただ仏像の上でブランコを揺らし、己の楽しみに耽る。初めの一則は、このように述べている。心中に仏を宿す者は、外物のしがらみに縛られず、また仏家の礼法にも拘泥しないものだ、と説くのである。

この史料は『夢窓国師語録』巻上(大正八〇、四五九b)にある。まず「査論文」「査中文」は、ともに「拄」を網掛けの「種」の字に誤る。また「前」「天」「氈」「鞆」(下平一先)が押韻するので、「前」と「後」の字の後に、読点を挿入すべきである。

次に『夢窓国師語録』を確認すると、この上堂の前日は「結夏小參」すなわち安居と言われる本格的な修行期間の初日であった。そうすると、夢窓が次のように言ったと解釈すべきである。

「修行期間中に(鉢盂口向天)(鉢の口を上に向けて殊勝に乞食行)を行なうことと思うが、修行期間終了後は(鞆却紫茸氈)(貴重な紫茸氈を鞋の革などに使用したりして台無しなこと)をしでかすであろう。それでまさしく今日のところはどうかだ。拄杖を突いて言った。「寒山すなわちおまえたちは安居であるとかないとかに関係なく、須弥山の上でブランコに乗るような大自在を得よ」。

なお「須彌頂上打鞆鞆」については、『句双葛藤鈔』(『禅学典籍叢刊』第一〇巻下、臨川書店、二〇〇〇、五六〇頁上)「蟪蛄眼裏放夜市、大蟲舌上打鞆鞆」の条に「蟪蛄上でも受用したものは細微塵に入、大方処を絶たものぞ、物にすぐれた物のわざ也」とあり、そこから「大自在を得る」と考える。

【一三】次日上堂「法歳已終、人人策功。寒山拈却蓋面帛、元是東家李大翁」。

(「査論文」四六頁・「査中文」三九頁)

「査論文」の解釈

また次の一則は、法歳の礼が終ったにもかかわらず、なお人々が仏の功徳を讃えていたところ、^④寒山が仏像の顔を覆う絹布を掲げ、仏像が実はただの村人であったことに皆が気づく、という内容である。人間には皆、仏性があり、禪と俗とに境目が無いことを説くのだが、ここに述べられている内容は、夢窓という天才による独創であろう。彼は自らの想像力によってかくも喜劇的な情景を作り出したのである。寒山はここでは一人の喜劇役者となっており、無学祖元の題賛に見られた喜劇性は、夢窓の手によって更なる発展を遂げたと言えよう。

この史料も『夢窓国師語録』巻上(大正八〇、四五七a)所収のものだが、まず「査論文」「査中文」ともに「人人策功」と「寒山拈却蓋面帛」の間にある「卓拄杖一下云」の句を脱している。それを補って、私の解釈を示す。

「すでに解夏(修行期間が終了)したのだから、みなにはご所得があったことであろう」。拄杖を突いて言った「(いやいや立派な)所得があるかと思っていたが)寒山すなわちみながお面をとつたら、なんとあちらの家の普通のおっさんではないか(なんの進歩もない平々凡々なままではないか)」。

私は「東家李大翁」とは「某所の某甲」という意味だと考える。ただ「査論文」のように、「ただの村人であった」と解することは可能である。

しかし「寒山拈却蓋面帛」については、夢窓自身が、以下に引用する『夢窓国師語録』巻下、陞座「上杉法禪禅尼小祥忌請」(大正八〇、四六五b)でも同じように「……拈却蓋面帛、元是」の構文を用いるが、「査論文」の傍線④をふまえて、傍線dを「西施が仏像の顔を覆う絹布を掲げ、仏像が実はただのなりの家のばあさんであったことに(皆が)気づく」と解釈して、文意が通るとは思えない。

所以道夢裏明明有六趣、覺後空空無大千。倘能於此薦得、^d西施拈却蓋面帛、元是隣家老母嬪(だか

ら夢の中では、六道の世界がはっきりとあったというのに、覚めてみれば、空っぽで大千世界までもないというわけだ。もしそのところをきちんと理解したならば、あの絶世の美女の西施だって化粧を落とせば、なんととなりの家のばあさんではないか。

○「法眷疏」

【一四】寒山皺眉、拾得笑撫掌。咲箇什麼、歇後鄭五作宰相。

〔査論文〕四九頁・「査中文」四二頁

「査論文」の解釈

「法眷」とは、共に修行に励む道友を指すが、ここではその道友が寒山拾得の形象に対比されている。苦勞して修行する者は、木に登って魚を求めるようなもので、拾得に一笑されるだけである。そのようにして悟りを求める者は、歇後詩しか作れない鄭縈が宰相となるようなものであり、何一つないえることはない、と説くのである。古剣は寒山の滑稽な形象を用いることにより、悟りを求める世俗の者たちを嘲笑し、諷刺しているのである。なお、ここに見える寒山が眉をしかめるという仕草は、彼の独創によるものであろう¹⁷⁾。

本史料は古剣妙快『了幻集』（『五山文学全集』三卷、二一六六頁）に収められるが、まず表題の「法眷疏」とは、通常「新命の同門の友が、その入院じゅういんを勧め慶賀する意味を以て書かれる入寺の疏」のことだが、この文章は「疏」すなわち四六文でもなく、その内容も「入院を勧め慶賀する」ものでもない。この場合の「法眷疏」とは、法眷に対する古剣の返札の語のことなのである¹⁸⁾。

以下に私の解釈を示す。

寒山や拾得のようなみなさんは、あるいは眉をひそめ、あるいは笑いながら手を打って（慶賀して）

下さっている。では何を笑いになつていたのであろうか。私が住持することを笑つて居るのだ。というのも、私が住持するなんて、歌後詩を作つていた鄭繁が宰相になつたのも同然だからだ。

(2)翻刻図録の参照不備

【一五】杖麴曲尺剪刀、三代助楊聖化、両手擘破面皮、至今索尺高価。

〔査論文〕五七頁・「査中文」四五頁

「査論文」「査中文」ともに、この賛文を「寒山拾得」の画賛だとするが、『無象和尚語録』巻下(『五山文学新集』六卷、五九〇頁)には「誌公和尚」と表題され、宝誌図の画賛だとする。また網掛けの「桃」は誤りで、「挑」が正しい。しかし「査論文」は、『五山文学新集』との相違に言及しないだけでなく、「寒山拾得」の画賛とみなす根拠についても全く説明しない。

たとえば第一句「杖挑曲尺剪刀」は、『景德伝灯録』卷二七「金陵宝誌禅師伝」(大正五一、四二九c)に「(錫杖)頭環剪刀尺銅鑑、或掛一兩尺帛」とあるように、宝誌の錫杖に剃刀・鏡・帛などが掛けられていたことを表す。

また第二句「三代助楊聖化」も同「金陵宝誌禅師伝」(大正五一、四二九c～四三〇a)によると、「三代」とは宋齊梁の三朝のことであり、宝誌は各朝で神異の能力を発揮していることを指す。劉宋にあつては、その歌が予言のように当たつたので、土庶がみな宝誌につかえ(時或歌吟詞如識記、土庶皆共事之)、また南齊の武帝は、宝誌を宮中に招き入れ(帝延於宮中之後堂)、梁の武帝との間に交わされた問答も「金陵宝誌禅師伝」に載せられている。

さらに第三句「両手擘破面皮」は、「張僧繇が、宝誌和尚の画像を画こうとしたところ、宝誌が指を

もって顔面をつんざいて、十二面観音を中から出したので、ついにその画像を画くことができなかった」という故事を表わす⁹⁾。したがって本史料は、「誌公和尚」の画賛にまちがいない。

このことより、私は次のように判断する。「査論文」は、この史料を全く読解することなく、「寒山捨得」の画賛として誤って引用しているにちがいないと。

○「寒山図」

【一六】風前執筆欲裁詩、想象渾如何如思。堪笑至今吟未就、瘦肩高声立多時。

〔査論文〕六三頁・「査中文」四七頁

この史料は、おそらく査屏球氏みずからが、静嘉堂文庫美術館蔵「寒山図」に書された画賛を図版から翻刻したものだとは私は推測する。しかし「査論文」の引用のうち、網掛けで示した六字は誤っている。「査中文」も同文であるから、単なる校正ミスとは考えられない。正しくは次のように改めなければならぬ。「象^x↓像^x 渾^x↓洋^x 何^x如^x↓有^x所^x 笑^x↓咲^x 声^x↓聳^x」。なお、「査論文」「査中文」では引用史料中の「咲」の字はすべて「笑」に誤って変換されている。

実はこの「寒山図」については、『書の国宝 墨蹟』（読売新聞大阪本社、二〇〇六）一四五頁に図版、三〇六頁に釈文がある。『書の国宝 墨蹟』を見れば、これらの誤字は回避できたのである。

もちろん査屏球氏が日本の出版物を見ることができなかったという理解は成り立つ。しかし査屏球氏は復旦大学中国語言文学系教授であって、中国人学者の中でも、日本の出版物を閲覧する機会には恵まれているはずだ。

事実この「寒山図」も「査中文」一一頁に、その図版が転載されるだけでなく、この「寒山図」が『新指定重要文化財Ⅱ 絵画巻』（毎日新聞社、一九八二）にも収録されていることが注記されている。また

「査中文」三七頁脚注によると、査屏球氏が『五山文学集』『禪林画賛』を日本人学者より借覧したことも記されている。

3 【史料引用の仕方】

(1) 二首を一首に誤るもの

○「送心月吾藏主之雲居」

【一七】秋陰月黑少人観、半夜憑欄想広寒。好看天龍指頭上、孤明歴歴不容瞞。心月相逢子細観、不
円不缺逼人寒。寒山只解尋光影、対面分明被眼瞞。

〔査論文〕四七頁・「査中文」四〇頁

まず押韻字「観・寒・瞞」(上平十四寒)に注目すれば、二首を一首にしていることがわかる。「査論文」「査中文」も改行せずに一首として引用しているから、単なる校正ミスとは考えにくい。

実際、『空華集』(『五山文学全集』二卷、一三六九頁)を確認すると、二首に分けられている。

○「和韻答天僮藏海和尚」

【一八】袒灯輝処木鷄鳴、眨得眼来天已明。一喫寒山逢拾得、風前尽把此心傾。昨夜虚空曝曝鳴、同
風一句太分明。破沙盆子翻筋斗、天僮堂前法雨傾。

〔査論文〕五〇頁・「査中文」四二頁

本史料も、押韻字「鳴・明・傾」(下平八庚)を確認すればわかるように、二首を一首にしている。「査論文」「査中文」はともに改行することなく、一首として引用している。単なる校正ミスとは考えにくい。

実際に『了幻集』(『五山文学全集』三卷、二〇九四頁)を確認すると、二首にしている。また網掛けの字は誤って引用されているから、次のように改めなければならない。「笑^x↓咲。楯^x↓祐」。

(2) 対句無視の引用

まず『了幻集』(『五山文学全集』三卷、二二四七頁)から、「月浦歌為竺首座」の全文を、その構造がわかるように、以下に引用する。

○「月浦歌為竺首座」

【一九】靈山話曹溪指、平地無風怒涛起。透出円欠未生前、一色蘆花秋似水。

霜白冷湫々、誰留此中洲。吐却七八箇、随流不随流。

識自本心、見自本性。明来暗来、如鏡照鏡。

君不見謝郎、

只在釣魚船、氷輪碾破三万六千頃之金波不夜款、

乃歌残婦去也、桂擢穿過七十一二朶之煙島若箇辺。

又不見寒山子、

吟斷碧潭清皎潔、湛々寒光浸寥泬。喚醒天宮夢一場、無端釘取虚空槪。

〔査論文〕五〇頁・「査中文」四二頁

*▲指・起・水(上声四紙)○湫・洲・流(下平一七)■性・鏡(去声二下四歌)○船・辺(下平一先)●潔・沈(入声九屑)楪(入声六月)

波線部分が「査論文」が引用した箇所である。対句を無視した引用であることが明らかである。傍線部まで含めた対句に沿った引用を行なうべきであろう。

なお「査論文」「査中文」ともに網掛けの正しい字を【】内の字に誤っている。「瀆」^x・「場」^x・「毘」^x。次に同じ『了幻集』（『五山文学全集』三卷、二一四七頁）の「月澗歌為瑛侍者」の全文を、その構造がわかるように、以下に引用する。

【二〇】「月澗歌為瑛侍者」

銀蟾冷浸碧潭秋、上下交徹金波浮。万里無雲河漢近、道人漱玉臨清流。
真照不流光烜赫、真流不動亦照廓。大円鏡裡万象空、落々靈機洞靈覺。
君不見、

独超物外老南泉、信脚踏断玄中玄。到底誰分泥水路、千江東注還依然。

昨夜邂逅寒山子、話别靈山已久矣。把手浩歌歸去來、白鳥蒼煙尽知己。

月兮澗兮涉風騷、八万四千毛竅無塵勞、

明歷々兮孤迢々、好在流传曹溪正脉之滔々。

〔査論文〕五〇頁・〔査中文〕四二頁

*◎秋・浮・流下平十一尤●赫入声十二陌廓入声十藥覺入声三覺○泉・玄・然下平一先▲子・矣・己上声四紙□騷・勞・滔下平四豪
波線部分が「査論文」の引用箇所である。しかし引用するなら、傍線部まで含めた対句に沿った引用を行なうべきであろう。

なお「査論文」「査中文」ともに網掛けの正しい字を【】内の字に誤っている。「歴」^x・「曆」^x・「迴」^x・「回」^x。

(3)原文確認の不備——簡体字から新字体への変換誤り——

○「道号、月浦」

【二一】銀蟾飛出白蕃洲、浸爛乾坤一色秋。堪笑寒山心似水、清光全属釣魚舟。

〔査論文〕四九頁・「査中文」四二頁

網掛けの「萃」については、「萃」という字もあるが、「萃」は「蘋」の簡体字でもある。そこで『了幻集』(『五山文学全集』三卷、二一〇九頁)を確認すると「蘋」が正しいことがわかる。

この場合、翻訳者が論文原稿の「萃」の字を簡体字とみなさないで、「蘋」に変換し忘れた誤りと想定できる。そして訳者編者が原文に当たるだけの余裕がなかった可能性も高い。なお「𦵏」は誤りで「咲」の字が正しい。

【二二】結夏上堂「百二十日夏、今朝始鬢頭。飯抄雲子白、羹煮菜香浮。未問寒山子、先看水牯牛。山前千頃地、信脚踏翻休」。

〔査論文〕六六頁・「査中文」四八頁

網掛けの「鬢」(査中文)は「发」は、『希叟紹曇禪師語録』(卍藏七〇、四〇一b)を確認すると、「發(発)」とある。そして簡体字「发」は新字体「発」と「鬢」の二字に対応するのだから、論文原稿の簡体字「发」を、翻訳者が誤って「鬢」と変換したに違いない。

【二三】汝等只解看有字經、是故不能感天動地。山僧講一卷無字經、回上天之怒、散下民之愆。掃除千嶂雲、放出一輪日。俾五穀豐稔万姓誦誦。看看。上無点劃、下絶方円。聽著則耳門塞、撰著則眼睛穿。缺齒老胡猶不会、𠄎𠄎𠄎影返西天。

〔査論文〕六八頁・「査中文」四九頁

「只」については、「只」という漢字もあるが、「只」は「隻」の簡体字でもあるので、たとえば傍線eの「只」はそのままよいが、傍線fの場合は、「達磨が隻履を携えて西天へ帰って行った」という伝承

を踏まえており、網掛けの「只」の字は「隻」に変換しなければならない。実際に『大覚禪師語録』巻上(大正八〇、五六c)は「只」と「隻」を正しく区別している。

なお網掛けの「詞」「攪」は誤りで、各々「詞」「覷」の字が正しい。また「晴」については、「査中文」は「晴」と正しく引用しているので、翻訳編集の段階で発生した誤りにちがいない。

○「寒山」

【二四】凡聖龍蛇一串穿、生苕帚換幾文錢。可憐三椀自家酒、醉倒文殊与普賢。

(「査論文」七一頁・「査中文」五〇頁)

網掛けの「憐」については、『南江宗沅作品拾遺』(『五山文学新集』第六卷、二六六頁)を確認すると、「怜」とある。

「怜」については、「怜」という字もあるが、「憐」は「憐」の簡体字でもある。この場合「査中文」は「怜」に正しく作っている以上、「査論文」の誤りは「怜」を簡体字だとみなして、機械的に「憐」に変換したために生じたものである。

なお、網掛けの「生」「椀」は誤りで、それぞれ「生」「盞」が正しい。

おわりに

「査論文」すなわち査屏球「寒山拾得の受容とその変遷」には、論文に必要な三要素、「問い」「答え(主張)」「論証」の「三部構成」が欠けている。

具体的には、「査論文」は先行研究を咀嚼することもなく、論点の抽出も行なっていない。そのため「問い」が設定されていない。「答え(主張)」についても、史料や情報を門派ごとに時系列的に羅列しているだけである。その「論証」に至っては、誤読のみならず、引用史料に誤字が頻出する。また句読の誤りも多く、それらは漢詩文の「修辭法」の基本に反している。

五山関係史料を用いる学問において、論文のチェック体制が機能していれば、論文集『蒼海に交わされる詩文』刊行前に、「査論文」の「三部構成」の欠如や「修辭法」上の誤りは修正できたであろう。そして「査論文」を、そうした修正により、割り当てられた貴重な資源に見合うだけのものに、少しは近づけられたにちがいない。

ただ本稿には、少なくとも二つの問題がある。第一に「査論文」を批判しているにもかかわらず、私は「寒山拾得のイメージがどのように受容・変容されていったか」について、自分の考えを記していない。第二に、そもそも完全無欠なチェック体制など存在しないのだから、「査論文」が、偶然、五山関係史料を用いる学問のチェック体制から漏れたのかもしれない。しかし私は『蒼海に交わされる詩文』全体ではなく、瑕瑾に該当する「査論文」だけをとりあげて批判している。この二点は偏頗に失する。これが〈雑記〉と冠した理由でもある。

【注釈】

(1)同書四二頁の記述を掲げる。「論文にはつぎの三つの柱がある。(1)与えられた問い、あるいは自分で立てた問いに対して、(2)一つの明確な答えを主張し、(3)その主張を論理的に裏づけるための事実的・理論的な根拠を提示して主張を論証する」。

(2)『漢詩入門』には、修辭上注意するものとして、脚韻・对句・平仄等があげられる(一七二―一九九頁)。このうち脚韻は、近体詩では(1)必ず偶数句末で韻を踏む。(2)一韻到底である。(3)脚韻は原則平字である。古詩では(1)韻の踏み方には、いろいろな型がある。(2)換韻する(ただし一韻到底もある)。(3)脚韻は仄字で踏むものもある(二〇三頁)。他にも通押、すなわち「同韻でなくとも似た韻の字で押韻してよいこと」(一〇七頁)があげられ、換韻についても「同韻の部分が内容の上でひとまとまり」(一〇六頁)であることが述べられる。以上の規則は、その対象が漢詩だが、漢詩以外のものにも有用と考える。

(3)類似した考えを述べるものとして、橋本雄「北条得宗家の禅宗信仰をめぐって―時頼・時宗を中心に」(『アジア遊学』一四二「古代中世日本の内なる〈禅〉」勉誠出版、二〇一一)がある。同論文一一〇頁で、橋本氏は「従来の五山関係史料〈解釈〉にはいまだ少なからぬ問題が存すると考え」と述べる。その上で、引用する五山関係史料に対して、正面から逐一の解釈を示すことを試みる。

なお、正面きつた解釈を行なっていない論文をどう評するかという問題がある。もちろん「五山関係史料を読点だけで句読し(画賛の場合、句読もせず)、必要な部分だけを本文で言及すれば事足れり」という考え方の論文もあるが、いずれにせよ、批判する側が正面きつた解釈を示さなければならぬ。それは論文を作成した側よりも、チェックする側の負担ばかりを重くし、生産的ではない。

しかし、正面きつた解釈を示しているとみなされる側も問題を有している場合がある。というのも、五山関係史料を用いる学問もまた人文科学に分類される以上、客観的な論証やその再現性が保証されなければならないが、その追試が容易ではないからである。

たとえば水墨画の例だが、綿田稔『漢画師―雪舟の仕事』(星雲社、二〇一三)一三頁に、次のように述べられる。「(一)こと室町時代の場合、相手が〈禅〉の香りのする〈水墨画〉だけに、素人目には不可解なことが最初から正当化さ

れているから、なおのこと厄介だ。その素人には読解不能な理屈を教導するのは、実のところ専門家に任されている。その専門家の一種が美術史家なのだ。つまり禪や水墨画については、専門家にしたがうのがその習いなのである。

そしてそれが、橋本氏が逐一の解釈を示しているにもかかわらず、前掲論文一〇七頁で、次のように述べざるをえなかった理由だと推測する。「ただしそれが実際に理解・感得できるかはまた別問題であるが」と。

もとより禪の専門家や伝道者・美術史家や美術家はじめ、感得できた者にしかわからない、検証不可能な領域が確かにあるのだろう。しかしそれが「正当化されている」となると、専門家に任せた部分を検証する時に、どうやってその再現性を保証するのであろうか。

こうした専門家にしたがうよりほかないという認識や姿勢、これこそがまた「査論文」がノーコメントで放置されてしまった原因の一つであると私は考える。

(4) 前掲『蒼海』に交わされる詩文「序説参照」。

(5) 「査論文」には「査中文」についての言及がないが、たとえば次のような注記が必要である。「この翻訳は、〈寒山拾得的受容と変容―五山禅僧詩画中寒拾形象と宋元禅文学関係考〉『寒山子暨和合文化国際研討会論文集』浙江大學電子音像出版社、二〇〇九」に著者が一部改訂を加えた修正版に基づく」。

(6) 石原千秋『大学生の論文執筆法』(ちくま新書、二〇〇六)七七頁参照。

(7) 画像は「国立国会図書館デジタルコレクション」で公開されている。<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2532103> (最終検索日:二〇一八年三月六日) 参照。

(8) 画像は京都大学附属図書館「京都大学貴重資料デジタルアーカイブ」で公開されている。<https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/collection/vanimura/hu> (最終検索日:二〇一八年三月六日) 参照。

(9) 水谷誠「蘇軾詩における上二去通押について」(『詩声樸学 中国古典詩用韻の研究』研文出版、二〇一五、二六九頁)

は、北宋において上_レ去通押が生じたのは、上声・去声の声調の調値の共通性が主たる要因であろうと推測する。ここでも同様に理解できると考える。

(10) 徳韻・通撰入声韻の通用。錢毅『宋代江浙詩歌合韻譜』(西南交通大学出版社、二〇一三) 一〇頁では、「宋代通語」すなわち汴洛(開封・洛陽) 一帯の語音において、「広韻」徳韻のうち(国・北・墨・得)などが、「屋燭部」と通押するという。「緑」(入声二沃)は、「屋燭部」に属す。「屋燭部」は「広韻」の屋沃燭韻に相当する。

(11) 江撰宕撰入声韻の通用。無字祖元は、今日の浙江省寧波市の出身である。前掲『宋代江浙詩歌合韻譜』九頁によると、「宋代江浙詩韻」の韻部は十八部に分けられる。「閤」(入声十葉)「岳」(入声三覚)は、ともに「宋代江浙詩韻」の「鐸覚部」に属す。「鐸覚部」は「広韻」の鐸覚葉韻に当たるとする。

(12) 画像は注(8)参照。

(13) 「京大本」画像は注(8)参照。

(14) 画像は新潟大学附属図書館「新潟大学古文書・古典籍コレクションデータベース」で公開されている。http://collections.lib.niigata-u.ac.jp/bibliograph/item/7142/ (最終検索日:二〇一八年三月六日) 参照。

(15) 「誤読」というあえて異なる読み方を試みるものがある。その一つに、師茂樹「阿頼耶識を誤読してみる 文字と仏教二」(『春秋』五二七号、二〇一一) がある。

師氏は、唯識説の「この世界にあるものは(識)だけであって、見えている、聞こえていると思っているものは実は存在しない」という一般的な理解に対して、「心が世界を生み出している、という因果関係をひっくり返して、世界とそこにあるものはすべて、そもそも(識)的に存在しているのであり、衆生の精神はそのなかの特殊なあり方なのであるという風に見てみてはどうだろうか」という「誤読」を提案する。

ただその目的は「阿頼耶識について新たな見方を提示することではなく、世界について考えるためのヒントをひ

ぱり出すこと」であって、結論を導きだす意図はないと断っている。したがって師氏の文章の各段落末尾も大半が推量語でしめくくられている。

師氏の場合は、一般読者に興味深く読ませようとする点で良心的だが、「査論文」には、かかる「誤読」を用いたとする断りもない。

そもそも「査論文」は学術論文である以上、こうした「誤読」を試みることに意味はない。なぜならば、論文の構成要素の一つである「答え(主張)」が導き出せない可能性が高いからである。

(16) 「査論文」六七頁にも「寒山拾得が普賢菩薩・文殊菩薩の姿で現れた」と記されている。しかし閻丘胤撰「寒山子詩集序」に「寒山文殊、遯迹國清。拾得普賢、状如貧子」(寒山は文殊、國清に遯迹す。拾得は普賢、状は貧子の如し)とあるように、「文殊は寒山の前身・普賢は拾得の前身」である。

(17) 「寒山皴眉」の表現を、「査論文」は古劍妙快の独創と推測するが、誤りである。たとえば、以下に挙げる投子義青(一〇三二〜八三)の用例がある。『投子義青禪師語録』卷上「歳旦上堂」「拾得來相賀、寒山空皴眉」(正統七、七三八b)。なお古劍の生寂年は不明だが、夢窓疎石に嗣法し、貞治四年(一二六五)元より帰国している(玉村竹二『五山禪僧伝集成』思文閣出版復刻版、二〇〇三、一九二頁)。

(18) 「法眷疏」については、玉村竹二『五山文学』(至文堂、一九五五)一四三頁参照。

また同書一一八・九頁に入院法語をとり上げて次のように述べる。「新命住持が任寺に到着し、山門より仏殿……(中略)……と順々に奥へ晋み入る時に、その伽藍々々に於て、一々法語を述べながら、ついに方丈に入り、公帖即ち住持任命の辞令を拈じ、その寺よりの招聘状ともいべき山門疏、同州内の諸寺(諸山疏)。天下一般の縁故者(江湖疏)、同門の旧友(同門・法眷・友社・道旧等の疏)よりの賀詞を一々拈じて法語を述べて謝意を表し、ついに住持の座につく。したがって、ここでの「法眷疏」とは傍線部からわかるように、「新命住持が(法眷疏)に対して

謝意を述べた語」を意味する。

(19) 『仏祖統紀』卷三七(大正四九、三四八c)に「嘗詔張僧繇寫誌真。誌以指髻破面門、出十二面觀音相、或慈或威。僧繇竟不能寫」とある。

(20) 『景德伝灯録』卷三、菩提達磨章(大正五一、二二〇b)に「後三歲、魏宋雲奉使西域迴、遇師于葱嶺。見手携隻履、翩翩獨逝。雲問(師何往)。師曰(西天去)」とある。

